
異世界とオレと迷宮と??

RAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界とオレと迷宮と??

【Nコード】

N3470Z

【作者名】

RAI

【あらすじ】

高校を浪人したオレは、RPGにはまっていた。一般的に廃人と呼ばれる域までに達した。

ある日一通のメールが届き、俺は異世界へトリップした…。

魔法募集

魔法を募集します！

2〜3個考え付いたのがありますが、イメージが偏りすぎて戦闘がマンネリ化する可能性があります！

皆さんお願いしますm(_____)m

私に知恵を貸してください。

すみません本気です^{マジ}。

できればメッセージで送って欲しいです。まとめやすいので。

普通の魔法・・・大歓迎です。

召還獣・・・バハムートとかの二次は無しで

ネタ武器、ネタアイテムも募集します。

募集期限は設定しないので、よろしくお願いします。

キャラ設定（前書き）

キャラのステータスなどをのせていきます。

各話のあとがきにものせているので、ただの自己満足です。

どうでもいいので読み飛ばしてもOKです。

キャラ設定

キャラ設定です！！話別にのせていきます。

一話

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア（弓）

ローブ

ステータス

Lv . 1

HP 3 4 9

MP 2 4 5

AP ? ? ?

DP 5 9 7

アリア 女 ハーフエルフ

装備 無し

ステータス

Lv . 3

HP 3 9 2

MP 3 4 7

AP 1 2 4

DP 2 5 6

二話

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ
ステータス

L v . 1

H P 3 4 9

M P 2 4 5

A P ? ? ?

D P 5 9 7

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ
ステータス

L v . 3

H P 3 9 2

M P 3 4 7

A P 1 2 4

D P 2 5 6

三話

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ
ステータス

L v . 4

H P 3 9 4

M P	4	6	2
A P	5	8	5
D P	5	9	7

使用魔法 ファイアボール、ウォーターボール、サンドボール、

 ブラストボール（～～ボール）

 ゴリアテ（三倍も）

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ
ステータス

L v	・	5
H P	4	2
M P	3	7
A P	1	5
D P	2	7

使用魔法 ウォーターボール、ヒール

六話

クロノ 男 エルフ？

装備

 グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ
ステータス

L v	・	7
H P	4	2

M P	5	2	4
A P	6	4	5
D P	6	9	2

使用魔法 ファイアボール、ウォーターボール、サンドボール、

 ブラストボール（～～ボール）

 ゴリアテ（三倍も）

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ
ステータス

L v	5		
H P	4	2	6
M P	3	7	4
A P	1	5	3
D P	2	7	3

使用魔法 ウォーターボール、ヒール

クロノ 男 ハイエルフ

装備

 グリンディア（弓）、ロープ、布の靴、グローブ
ステータス

L v	7		
H P	4	2	3
M P	5	2	4
A P	6	4	5

D P 6 9 2

使用魔法 本人が知っている魔法全て

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ
ステータス

L v . 6

H P 4 6 6

M P 3 9 4

A P 1 8 3

D P 3 0 3

使用魔法 ウォーターボール、ヒール

01話　始まりと出会い？

俺は年齢的には高校二年の男である。あまり顔立ちも良くなく、スポーツもできない。学校にも行っていない。そう、浪人である。受からなかったのである。今はいわゆる『ニート』をやっている。勉強する気もない。

そんな俺が、今ハマっているのがRPGだ。なんと言ってもあのコツコツ感が堪らない。美少女なんか出てくると…最高だ…。

俺はいつもどおりRPGをやっていたら一通のメールが届いた。

「…誰だ？メールをしてきそうな友達には居ないぞ？」

とりあえずメールを開いた。ところが、画面がブラックアウトし何も表示されなくなった。

「はあ？」

と思いつつも、しばらく待ってみた。十分ぐらいだろうか。画面に入力画面が出てきた。

『貴方の性別は？』

無論男だろう

『貴方の種族は？』

種族？まさか、RPGか？ええと？『ヒト、獣人、エルフ』か。エルフだな。

よし！と決定をクリックした瞬間、俺の心臓が止まった…。俺は薄れ行く意識の中何も考えることができなかった。

俺は、草むらの中で座っていた。ここはどこだろう。俺は死んだのか？肌触りの良い服を着ている。右手には長い弓を持っている。左手で耳を触ってみた。えっ？尖っている？

さほど遠くない所でヒトと何かが戦っている。距離は…2〜3キロ？あれ？おかしい。俺の耳ってこんなによかつたっけ？

そう思いつつもヒトを助けるべく俺は走り出した。

体が軽い。速く動ける。速く、もっと速く。そうしているうちに戦っているそばの丘の上についた。

見たところヒトの方が劣勢だ。ヒトの方が数で勝っているが、魔物？の方が力が強く人の攻撃が効いていないように見える。俺はすぐさま弓を構えて矢をつがえる。

見よう見まねだが、まるで磁石でも付いているように矢は魔物の頭に吸い込まれていく。さらに二本、三本と放っていき魔物を全滅させた。魔物は人型だった。

とりあえず、村人たちに近づいてみる。

「有難うございました。今、代表の者を読んできますので少々お待ちください。」

そう言って走っていった。ん。なんか嫌だな。こんなに敬語使われたこと無いぞ？

考え込んでいると突然話しかけられた。見た感じ村長のようだ。

村長「村を守っていただき有難うございました。この村の村長のダルクといいます」

中々体格のいいおっちゃんだ。

「どういたしまして。それよりもさっきのは何ですか？」

「さっきのはこの辺に住む魔物です。ある程度の群れを作って生息しているようで…。ご存知ないんですか？」

「えっ、ええ、まあ」

「今夜はどうされますか？もし泊まってくださるなら、最大限のおもてなしをさせていただきますが。」

「いいんですか？じゃあお願いします。」

「ええ。どうぞ、こちらです。」

そう言つて、先頭を歩いていった。村の人は様々だった。腕にも毛が生えている女性もいたが、人の方が多いようである。

建物も、木と藁で作った簡単なものだ。村長の家についた。正直言つて豪華だ。

村長に中へ通される。中も豪華だ。それにしても、他家との違いはなんだ？

「お部屋の準備が整うまで、この部屋で少々お待ちください。」

「はい。そういえば、まだ名乗っていませんでしたね。俺はクロノ

…？クロノ…」

なんでだ？自分の名前がわからない。

「クロノ様ですか。私はダルクといいます。」

「はっ、はい」

「それではごゆっくり。」

そう言つて村長は出ていった。

「ふー」

それにしてもなんでだ？自分の記憶が…。ない。

名前…分からない。うーん…。

「あっ、あの。」

「ん？何？だ…。」

美少女だ…それも絶句するほどの。髪はまっすぐに伸ばしており柔らかな金色だ。目は青く、クリっとしている。スタイルは抜群によく、胸は手のひらから少しあふれるぐらいに盛り上がっている。かといって、大きすぎる事もない…俺のぴったりだ。

「ク、クロノ様っ!」

「…」

「私を仲間にしてください!!」

「はあ？」

俺の記憶が正しければ、人はエルフを恐れるはず…。

「俺はエルフなんだ。」

「えっ?で、でも怖くありませんよ?」

「えっ?」

「はあ…。じゃ 『こら!アリア!』」

アリア「!」

アリアと呼ばれた女の子?は逃げていった。

「家のアリアが失礼をしました。すみません」

家の?ということはさっきのこと話しておいたほうがいいな…

「いえいえ。それよりも、アリアちゃんに仲間にして…って頼まれたんですけど…」

「そうですね…アリアが…。では、連れて行ってください。」

「はあ?何ですか?」

「い、嫌ならいいんです！すみません。」

「いや…別にいいんですけど…。何故です？」

「アリアは…人とエルフの間に生まれたんです。人に近いですが、人より魔力が高く恐れられています。」

なので、生まれたときから周りに避けられているんです。」

「ふー…。わかりました。でも、なんで私なんですか？」

「強いから…？」

ようにはなんとなくらしい。

>>>アリアが仲間になった<<<

01話　始まりと出会い？（後書き）

<補足説明>

最初に言います！主人公は死んでいます。主人公の武器は謎の空
間（現在）にあり、出し入れ自由です。
アイテム

クロノ　男　エルフ？

装備

グリンディア（弓）　　ローブ

ステータス

Lv・1

HP　349

MP　245

AP　????

DP　597

アリア　女　ハーフエルフ

装備　無し

ステータス

Lv・3

HP　392

MP　347

AP　124

DP　256

02話　村にて

一日目

俺は今村長の家にいる。ベッドも柔らかい。と、言ってもスプリングベッドには敵わないが…。

部屋は、広い・・・すごく広い。日本で言う豪邸。戦闘で使った弓は、体の中に吸収されていた。なんとなく念じれば出てくる。

「すみません。お食事の用意ができました。」

「わかりましたあ」

今話しかけてきたのは、部屋の外にいる使用人だ。確か・・・ア\nンナさんだった気がする。結構かわいい。こう・・・なんか、守つてあげたくなるような感じ。つか、間延びした声になってしまった。

リビング？に降りたら、豪華・・・と思いきや普通の食事が並んでいた。少し硬そうなパン。謎の野菜が入っているスープ。野菜の和え物だ。正直俺感覚で言えば少し質素な感じだ。

「どうぞ、此方にお座りください」

村長が客人とはいえ、普通の人に頭下げまくるのはどうかと思う・

・

「はい。」

よし！今回は間延びしない声が出た（笑）

さつきから無音だ。食器もフォークも木製なのでほとんど音がない。ある音といえば咀嚼の音……。しかも俺だけ……。村長とアリアはまるで貴族のように静かに、優雅に食べている。

「クロノ様はどちらへ向かわれているのですか？」

「えっと……」

俺はこの世界の地理についてまったく知識がない。とりあえず適当に……

「実は今までひとつのところに落ち着いたことがないんです。しかし、これからはアリアさんも一緒に旅になります。ですので、自分としてはひとつの所に落ち着きたいです。どこかいい町はありませんか？」

「うーん。王都の近くにある『カルム』はどうですか？あの町なら、ギルドもありますし王都が近いので物流も盛んです。」

「でわ、とりあえずその町に向かいます。」

こうしてこの世界の記念すべき？第一食が終わった。

部屋に戻った俺は、今の自分の状況について考えた。

まず俺は、自分のことを忘れかけてる。下の名前は思い出せない。前の世界のことはある程度は覚えている。しかし地名や人名などは思い出すことができない。

俺はこの世界についてまったく知らない。まあ、当然だが……

こんなものであろうか……。そういえばこの部屋には油に糸をたらしたランタン？があるだけだが十分に明るく感じる。

昼間の戦闘のときも、遠くの音が聞き取れた。身体能力も上がっていると考えてもいいだろう。

ローブをよく見てみると、何かわかった。防御力が高く、丈夫だ。という大体のことはわかった。

・・・わけわからん。そろそろ寝るか

～二日目～

おそらく朝早くにおきた。目覚めがいい。水で顔を洗い、昨日夕食を食べたところに行った。昨日の夕食とは違い、肉料理がある。

しかし、それも村長の前だけでアリアの前にはない。村長の顔を見るとあからさまに『しまった・・・』という顔をしている。

それから5～6分、話し合い・・・。

そこで話したことをまとめると・・・

エルフは肉を食べるのを嫌う

だから夕食は肉を出さずにいま食べていた

アリアはこれから旅一緒にをするので

肉のない生活慣れさせておこうと思った

こんな感じ？

それで俺は・・・

『自分は肉が好きだ』

ということを伝えた。

これにて一件落着。俺やアリアの前に肉料理が出てきた。

朝食の後、旅で使うものなどを買ったために町へ繰り出した。

武器屋、防具屋で分かれているようだ。とりあえず、アリアの防具を揃えるために防具屋へ向かった。

防具には頭／胴／腰／脚／靴があるそうだ。一般的には、頭と胴、靴を装備するのが基本らしい。

村長にたんまり？お金をもらっているので、値段的には問題ないだろう

「革の鎧を見せてくれ」

店主にいうとすぐに持ってきてくれた。

「ちょっと、つけてみてくれるか??」

「んゝ、少し重いですね」

「じゃあ、これならどうですか?」

次に店主が勧めてきたのは革のジャケットだ。

これも試着してもらった。

「ん、んっ」

がんばって、ジャケットの紐を締めている。しかし、ちょっときつそうだ・・・胸が。ふにゅん。と潰れている

少し目に悪い、いや、目の保養になるか。おい！店主！鼻の下伸ばすな！！

ほかには、革の膝当て、革のブーツを買った。

なんだかんだで、アリアの防具は整った。次は俺のだ。胴はロブがあるからいいとして、靴だな。俺は動きやすそうな布の靴を。弓を扱うので、布のグローブも買った。

お値段の合計は：革のジャケット 560メル

革の膝当て 170メル

革のブーツ 230メル

布の靴 220メル

布のグローブ 100メル

合計で1280メルだ。大金貨が10000メルで、金貨が1000メル、銀貨、銅貨が100メル・10メル小銅貨が1メルだから。金貨一枚と銀貨二枚。銅貨八枚だな。

次に武器を買う。できるだけいい武器を買いたいものだ。自分の武器はあるから、アリアの分だけを買えばいいだろう。

「すみません。どういう武器がありますか？」

「剣、槌、片手剣、槍などがあります。」

「どんな武器を使うんだ？」

「お義父さまに習っていたのは、片手剣だけです。」

「店主。片手剣のお勧めはあるか？」

「ここにあるものと、銀の片手剣ですね。」

「ちよつと、持たせてくれるか？」

俺が店主に聞くと、店主は快くokした。

「いいですね。軽くて振りやすいです。」

「それでわそれを。」

と言うと、店主がひどく驚いた顔をした。軽く深呼吸して落ち着くと商談を始めた。

「ごほん。えー、お値段は13500メルになります。」

ああ、なるほど。値段に驚いたのか。村長にもらった金はあわせ

て50000メルを超えていたので問題ない。

「わかりました」

そう言って俺はカウンターに大金貨や金貨を置いた。

「……」

店主は絶句している。ようやく、置かれた金貨に気づくと慌てて動き出した。

「あ、ありがとうございます。」

頭に汗が見えている。いくらなんでも慌てすぎだろう。

買い物が終わって村を歩いていると突然アリアがしゃべりだした。

「ほんとに良かったんですか!？」

「ん? 銀の片手剣のことか? 別にいいぞ?」

値段のことだろうか?

「……」

なぜだろう、沈黙した。

買い物が終わったら村長に行くように言われていた家へ向かう。

そこは魔法使いが住んでいるらしく魔法の基本程度なら一日でできるようになるらしい。

「ふう。けっこう遠いな」

「そうですか?」

アリアはかなり歩きなれているようだ。旅では置いて行かれそうだと、くだらない事を考えていたら目的の家に着いた。

キノコの家……ではなく、普通の家だった。

とりあえず戸を鳴らす。

「……」

もう一度。

「……」

「失礼します。」

中を見るとたくさんの紙や道具が散らばっている・・・こともなくきれいに片付いている。

中に入ると突然斜め前からボウガンの矢が飛んできた。俺は紙一重でよけると、体の中から弓をだし矢をつがえ矢が飛んできた方向に向ける。しかし、そこには無機質な丸が描かれているだけで何もない。矢をおろすと前から2mは軽く越している巨人が出てきた。

「誰だ

「・・・」

「誰だ」

どうやらロボットのようと同じ事を繰り返すようだ。

「俺はクロノ。村長の紹介で来た。」

巨人は黙って下がっていった。

続けて出てきたのは130センチあるかどうかわからない小柄な女の子だった。魔法使いの弟子だろうか。

「私はシクと申します。村長から話は聞いていました。そして、先ほどは失礼しました。お怪我はなかったでしょうか。」

とても澄んだ声だ。

「ええ。大丈夫です。それよりも何故あのような仕掛けを？」

「私が研究した書物を狙った盗賊が入ってくることがあるからです。私の書物は高く売れるようなので・・・」

「私の...と言うことは貴女が魔法使いなのですか？」

「はい。もう歳なのでたいした魔法は使えませんが。」

歳・・・？美少女に見えるが・・・

「魔法で外見を変えているんです。本当はおばあさんなんですよ。」
なるほど。便利だな、魔法って。

「私でも魔法を使えるんですか？」

「ええ。すべての人が魔法を使うことができます。もちろん、個人差はありますが。」

「教えてくれますか？」

「ええ。もちろん！それを村長に頼まれたのですから。」

「ではまず、貴方の体の中にある魔力を感じ取ってもらいます。手を出してください。手の上に魔力の塊を乗せます。」

シクが手の上に手を重ねると、自分の手の上に何かが乗っているのがわかる。

「これが魔力です。貴方の体中にあるので探してみてください。」
確かに頭からつまさきまで、体中にそれを感じることができる。

「ありましたか？では、それを手のひらに集めてください。ゆっくりと。」

ゆっくり集めてみる。体がだるい。

「濃い…こんな濃い魔初めて見た…」

「魔力に濃い薄いつてあるのですか？」

アリアがとても不思議そうにたずねる。

「ええ。魔力が濃ければ同じ魔法でも攻撃力が上がります。手のひらに乗っている魔力を体の中に戻してください。」

不思議な心地よさとともに魔力が体の中に戻ってゆく。

「では、こちらへきてください。」

その家のさらに奥へと進んでいく。突然回りが白くなり広い空間に立っていた。

「今から魔法を使ってもらいます。この空間の壁には魔法を防ぐための結界を張りました。まずは火系の魔法を使ってもらいます。」

「魔法を使うには、その魔法の具体的なイメージを持つことが必要

です。ファイアボールだったら燃えている玉をイメージすればいいんです。では、やってみてください。」

俺は、頭の中に火の玉をイメージし小声でファイアボールと唱える。目の前に火の玉がでて、すぐに消えた。

「すごいですね……。一発で出来てしまうなんて。」

「えっ？大抵の人はすぐにできるようになるの??」

「そんなことないですよ。よほど才能がない限り最低で1年以上、訓練してファイアボールができるようになります。」

「弓矢を魔法で作ることはできますか？」

これは完全に思い付きだ。これができるなら矢を持ち歩かなくてもいい。

「できると思います。ちょっとやって見てもらえますか？」

「ええ。わかりました。」

頭の中に矢を思い描く。軽い気だるさと共に手に矢が出てきた。

「これは使える……」

この後は、いろいろなレクチャーを受けた。

人にはそれぞれ得意属性があるとか、得意属性以外の魔法はうまくいかないとか、普通ひとつかふたつの属性しか扱えないとか……とにかく俺は規格外らしい。

それと、俺には治癒系の魔法が使えなかった。その後アリアも同じ事をやっていたが、水系と治癒が得意魔法らしい。

うん。バランスがいいなあ。弓矢も魔法で作れるし。あつ、もしかしたら雷とかの矢も作れるんじゃないかな？

魔法使いに礼をいい、すでに暗くなっている外へ歩いた。村長の家へ向かう。明日出発だ。

「ぎゃあああああ!!」

「!!」

突然村の入り口から悲鳴が聞こえた。

「魔物？」

アリアはそういつと駆け出していった。慌てて俺も追いかけていった・・・

02話〜村にて〜（後書き）

>補足説明<

お金について・・・

単位はメル！

大金貨	10000メル
金貨	1000メル
銀貨	100メル
銅貨	10メル
小銅貨	1メル

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ
ステータス

Lv	1
HP	349
MP	245
AP	???
DP	597

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ
ステータス

Lv 3

D	A	M	H
P	P	P	P
2	1	3	3
5	2	4	9
6	4	7	2

駄文ですががんばりたいのでよろしくお願いします。

誤字、脱字あるかもなのでご指摘、ご指南よろしくお願いします。

次回は戦闘です。

03話　　魔物襲来

慌てて駆け出していった俺とアリアが見たものは魔物の大群だった。腕が3本だったり、口が大きかったりするが、少なくとも200はいるだろう。

20人近くの人が武装して戦っているが既に押されている。アリアは腰にさしていた片手剣を抜刀し、戦いの中に身を投じた。

俺は体の中からグリンディアを取り出し、魔法で矢を作る。その矢を放ち、また次の矢を作る。体力的な方ではない、別の疲れを感じていた。おそらく、魔力を消費したためだろう。前のほうでは確実に魔物の数が減っていた。しかし、その後ろにもまだまだ魔物がいる。このままでは埒が明かない。

俺は魔法を使うためにイメージを広げる。

（一度に多くの魔物を葬るには、範囲の広い攻撃が必要だろう。必要なのは大きさと、攻撃力。火の玉は無理だ。水は回りに被害が出るから論外。雷は範囲攻撃には向かないし、風も同じ。土は…どうやって使うんだ？論外。いや、待てよ。大きさがなくても持続すれば…）

イメージを固めた俺は、小声で

（ゴリアテ）

と唱えた。

目の前の土が盛り上がり、形を成していく。もう二回、小声で同じものを唱える。土人形のようなものを三つ作った俺は、魔力に物

を言わせて自分が『敵』と認識したものを攻撃するようにプログラミングした。さらに、魔力で土の表面を覆って崩れないようにする。

三体のゴリアテは、俺の思惑ど通りに魔物の方へ向かっていく。戦っていた者たちはぎよつと

していたが、ゴリアテが魔物を攻撃し始めると自分たちも攻撃し始めた。

もう半刻ほどたったがまだ魔物たちが途切れる様子はない。既に、最初戦っていた者たちも数人負傷している。

俺は、もう三体のゴリアテを作って送り出した。

これでも若干おされ気味だ。俺はさつき思いついた、矢に属性をつける。をやってみることにした。火の矢、をイメージする。

「熱っ！」

それはイメージどおりにできたが、熱くて放してしまった。ただ燃えているだけではだめだったらしい。

敵に当たってから燃えるというのはどうだろうか。ちゃんとイメージしてから発動する。

手に矢が出てきた。外見は普通の矢だ。魔物に放ってみる。おお、燃えた。結構疲れる。

魔力が少なくなってきたのだろうか。疲れた。魔力は自然に回復するらしいがおそらく寝ないとだめだろう。まだ、普通の矢を出せるから――

「ギヤオオオオオオオオ」

「「！！！！」」

あまりの声の大きさに、その場にいた人が全員硬直した。

「お、オルトロスだ!!!」

誰かがそう言った瞬間、戦っていた者の半分が逃げ出した。しかし、半分は何か決意をしたような顔をしてそのまま魔物と戦っている。

「グルルルル」

魔物が一体真上に飛ばされた。二体、三体　　次々と飛ばされていく。どうなってるんだ？

ようやくそいつが見えてきた。ケルベロスの頭をひとつ減らしたような奴だ。確か、ケルベロスの弟だ。たてがみ鬣は一本一本がすべて蛇になっている。

オルトロスはふたつの頭を振り回して魔物を吹き飛ばしている。何故だ？仲間割れか？いや、違う。邪魔だったのだ。前に行くのに。

オルトロスが前線で戦っている者の目の前に来た。

ゴリアテが攻撃を仕掛けるが、ある者は大きな牙で、ある者は前足で破壊された。時間稼ぎにもう4体ゴリアテを生み出すが本当に魔力がきつい。こいつらもすぐに撃破されるだろう。何か対策を考えなければ・・・

ゴリアテが戦っている。どうすればいいのか。

あつ。わかった。ゴリアテが小さくて簡単にやられてる。単に大きく、強度も上げてみるか。

そう考えた俺は、さっきの大きさの3倍で、体の表面を覆う魔力

をできる限りあげてみた。予想通り・・・いや、それ以上だった。オルトロスの噛みつきを左手で止めると右手で頭をに殴った。さらにもう片方の頭も殴ると、プロでも認めるであろう見事なボディブローを決めた。

オルトロスは巨体を大地につけ、消えた。

さっき出した巨大ゴリアテに残った魔物の相手をさせている。村の近くにいた魔物は全滅していたが、少し遠くにいる魔物が数体いたので弓で葬ることにした。一体、二体と順調に葬っていったが三本目の矢を作り出そうとした瞬間、意識が途絶えた

03話 〱魔物襲来〱（後書き）

>補足説明<

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ
ステータス

Lv. 4

HP 394

MP 462

AP 585

DP 597

使用魔法

ファイアボール、ウォーターボール、サンドボール、
ブラストボール（〱〱〱ボール）

ゴリアテ（三倍も）

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ
ステータス

Lv. 5

HP 426

MP 374

AP 153

DP 273

使用魔法 ウォーターボール、ヒール

戦闘書くのは難しいですね。それに少し短いです。
次回はもっとがんばります。

04話　～騒動？～

目覚めるとカラダの近くに暖かく柔らかい感触があった。
しかし意識は再び闇へと引きずり込まれていった。

気持ちのいい朝だった。窓からは心地いい光が差し込み、体の調子もいい。昨日も降りた階段を降り、リビングへと向かっていく。
そこには凄く『良かった』と緩んでいる村長と、今にも泣き出しそうな顔のアリアがいた。二人の前にはやわらかそうなパンやスープ、ミディアムに焼かれた肉。噛むとしゃきしゃきしそうなサラダがあった。

そういえば凄く腹が減っている。まるで何日も何も口にできなかったような・・・、そんな感じだ。

「やっとお目覚めですか！」

「ああ。『やっと』って事はどれぐらい眠っていたんだ？」

この世界に来てから、言葉から何かを見つけることがうまくなっていた。

「およそ三日ほどです。魔力を全部消費していたようなのでアリアに添い寝をさせました。」

（ん？添い寝？あの柔らかい感触って…）

「！！！！！！」

「な、何か失礼なことはありませんでしたでしょうか！？」

当然廃人だった俺に彼女が居るわけもなく、女性経験もなかった。

「なっ、何故添い寝が必要だったのでしょうか？」

「魔力を消費しすぎると生命を維持する能力が低下します。これは、急激に魔力を回復させるためにマナを消費するためです。マナとは生命エネルギーのことで、これがすべてなくなると死にいたるとされています。」

生命を維持する能力が低下していたので、体温も低下します。それを防ぐために添い寝をさせました。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アリアが顔を真っ赤にしている。耳まで真っ赤だ。

「いや、なかったはなかったけど・・・。」

「はぁ・・・・・・・・」

村長がとても心配そうな顔で見てくる。

「その・・・多分・・・ですけど、交わったんですね。はい。」「・・・・・・・・」

今度は村長が沈黙しちゃったよ。どうしよう。

あえて、こっちから切り出してみる。

「とりあえずお腹が減ったんですけど・・・食べませんか？」

「ええ。（はい）」

またまた無言。食器が擦れる音のみ！凄い気まずい。

「ちょっと席をはずす。」

そう言って村長はアリアと共に廊下へ出て行った。

「~~~~~」

ちょっと聞き取りにくいが頑張れば聞き取れないこともない。

「お前はそれを分かってやったのか!」

「はい。お義父様。」

「くっ・・・」

いつもの温和な態度が嘘のようだ。

「もう、勝手にしろ!」たく、奴隷市から買ってきて楽しみにしていた物を!!!」

戻ってきた村長にはいつもど通りのスマイルが貼り付けられていた。

アリアが奴隷?つか、奴隷って人徳的にOKなの??

「~~~~ご馳走様でした。~~~~」

全員が食べ終わったところで俺は話を切り出した。

「できればすぐにこの村を出ようと思うのですが・・・?」

「はい。分かりました。今から出ても十分間に合うと思います」

いつもど通りの丁寧な対応・・・俺はそれが怖かった。

今は早朝である。ここに来てから俺も早起きになった。

いよいよ出発である・・・

04話　～騒動?～（後書き）

>補足説明<

奴隷：奴隷は奴隷市で扱われる商品である。男はダンジョンを探索するための手駒として、女は性欲を解消するために購入されることがほとんどです。

短かったですがつなぎです。できれば明日にはupしたいとおもいます。

05話　く到着く

ここにきて五日ほどたった。魔物いっぱいきたり、アリアが奴隷だったり

隣にいるアリアは、そのまま髪を下ろしている。防具にしては軽い、レザー（皮）の鎧を着けている。鎧といっても、肩などの大事な部分のみを覆っている。腰には片手で扱えるような銀製の剣が刺さっている。

俺は、とても肌触りのよいローブのみだ。

魔法は自分で作れるみたいだ。今度何か作ってみよう。

日も高くなってきたので出発だ。前には平原が広がる。

「最近では魔物も多く平原は危険なので、早めに行きましょう。」

すでに何体かの猛獣や魔物に出会っているが単に数が多いのだから。

「ああ、今日泊まるまでどのくらいだ？」

「運がよければ後3刻ほどで着くと思います。」

「運がよければ？」

「この平原の魔物を束ねている魔物があります。その魔物に見つかつて帰ってきた者はいません」

「なるほど」

「ただ一人だけ帰ってきた者がいます。その者が見たそうです」。

奴：私たちはグムと呼んでいます。人型で腕が四本あるそうです。その者は二日後に死に、その年に育てていた野菜は枯れてしまったそうです。」

「まるで神話だな…」

「『しんわ』？ですか？？」

「昔話だよ」

「ああ。なるほど。」

「ここには何かないの？」

「ティゴレス昔話ですね。」

「どんな話なんだ？」

「ええっと、この地方に伝わる伝説です。」

「話してくれるか？」

正直楽しみだ。

「はい！」

『これは遠い昔から伝わるお話です。

このグレゴリア地方は昔魔王が統治していた、という話があります。

魔王は心優しく、気候系の魔法を操る達人だったと言われています。村で日照りが起こったら雨を降らせた。このような話もたくさんの村で語り継がれています。

しかし、王都で「魔王はこの国を支配しようとかくらんでる」という噂がたちまち広がり魔王は処刑されてしまいました。

魔王は怒り狂いました。王都は壊滅状態。それで、人々に「魔王は危険」というイメージを持たれてしまったのです。』

「へえ〜。」

「この話には続きがあります。」

『魔王は王都を壊滅させるとアリシア山脈の方へ飛び去って行きました。魔王はそこで魔物を生み出していると言われています。このことから、悪者のイメージが強くなりました。』

「ですけど、おかしいですね。村を助けていた魔王を捕らえるなんて…。」

「ああ、まったくだ。」

心の底からそう思う。恩は恩で返すべきだ。仇で返してはいけな
いと思う。もつとも俺は親に何もできなかった上に、親よりも先に
死ぬという超親不孝をしてしまったが…。

様々な雑談をしているうちに目的のカルムへ着いた。

カルムの城門は大きく軽く俺の身長の5倍はありそうだ。今の
慎重が1m85cmぐらいだったから…結構でかいな。

基本的に誰でも入れるらしい。が、初めて入る人は入り口の衛兵
に話しかけているいろと登録する必要があるらしい…めんどく
せえなあ。

簡単だった、登録。2、3枚の書類に名前書いて、謎のカードに
血をたらすだけ。

そのカードが無いとこの町で何もできないらしい。宿泊まるにも、
武器買うにもこれが必要らしい。

「とりあえず宿を取りましょう。」

「えっ？家を買っんじゃないのか？」

「最終的にはそのつもりですが、まずはいい物件を探さなければい

けません。迷宮にもぐってお金も稼がなければいけませんし・・・」

つまり、現在は様子見で徐々に生活レベルを上げていく・・・と言っことでもいいのだろうか？うん。きつといいんだ。

今はとりあえず宿を探そう。

町を宿を探して歩き回る。外見はいい感じのところがあるがいまいちお値段がよろしくない。長い間お世話になりそうなので安めのところがいい。

結局一晩二人で銀貨二枚のところに入った。部屋の中はいい感じで、ベッドも硬すぎず柔らかすぎない。ただ・・・ベッドがひとつしかない。どうしよう・・・。まあ、気にするな！俺！何とかなるさ。

「今からギルドに登録しに行きましょう、・・・ご主人様・・・」

最後に何か言ったがなんといったのだろうか？

「ああ。ギルドって何をするところなんだ？」

「簡単に言えばギルドメンバーに依頼をまわす仲介業者ですね。これに登録しないと、魔物や猛獣を退治してもお金がもらえません。登録すると、一般の方より安く薬を購入することができます。」

「なるほど。」

「さらにランクというものがあります。上から、キング、クイーン、ナイト、ピジョップ、ルーク、ポーンです。ランクに見合った依頼を受けることができます。」

「ふむ。とりあえず登録に行くか。」

「はい。・・・ご主人様・・・」

また、聞き取れなかった。なんといったのだろう。まあ、いいか。とにかく行こう。

「ギルドにて」

ギルドは3階建てだった。1階で登録や依頼の受注などを行い。2階で武器アイテムなどの販売。3階はギルドの食事場やギルド職員の休憩ができるようになっていた。

今日用があるのは1階だ。ギルドのお姉さん（結構可愛い）に話しかける。

「今日はどんな御用でしょうか？」

「今日は、このギルドへの登録に来た。」

「かしこまりました。お連れの女性もでしょうか。」

「いえ、ちがうそうです・・・」

アリアも入るつもりらしい。

「では、カードを見せてください。」

カードとは、この町に入るときに作ったあのカードだ。それを見せると職員は奥へ入って行き、2～3分すると戻ってきた。

「はい。登録完了です。」

今から、ギルドについての説明をさせていただきます。

ギルドメンバーは月に十体以上の魔物が猛獣を狩らなければいけません。狩れなかった場合は強制的にギルドから脱退させられます。

「

《以後、アリアの説明とかぶるので割愛》

ギルドへの登録が済んだ俺たちは宿へと戻った。

この宿は食事つきなので、夕食を済ませると部屋へといった。

「ふう。」

俺がため息をつくときアリアは可笑しそうに笑った。

そういえばアリアが笑っているところを見るのは初めてかもしれない。

突然アリアが何かに気づいたような表情をし、真剣な顔つきになった。

「どうしたんだ？」

俺が尋ねると、

「実は・・・話があります。」

05話　く到着く（後書き）

>補足説明<

特にないですw

次回！明かされる驚愕の真実！！

ばればれの伏線ですみません。

ご意見！入れてほしい魔法！誤字脱字などなど！ありましたらお気軽に！！

06話　く買い物く

アリアは凄く真剣な顔をして言った・・・

「実は・・・私はご主人様の奴隷なんです!」

「えっ?ご主人様って誰?」

アリアが奴隷だと言うことは盗み聞きで知っていたが誰の奴隷かは知らなかった。

「貴方様です、ご主人様。」

「は?俺?何で?」

契約かなんかしたつけ?

「その・・・私の『はじめて』をご主人様に捧げたからです。」

なるほど・・・。交わることが契約なのか・・・

「なんで奴隷になったんだ?」

「私にはもともと兄弟がたくさん居ました。しかし、家は貧しかったのです。だから・・・。」

口減らしという奴だろうか。そんな感じだろう。

「それから私を育てたのが村長です。だけどあの人の部屋からは毎晩艶かしい声が聞こえてきて・・・わたしもそうなるのかと怖くなくて・・・それで、それで・・・」

貴方が優しそうだったから、あなたの奴隷になったほうがいいと思っ
て・・・グスッ」

なき始めてしまった。こういうときはどうすればいいのか・・・。
とりあえず慰めよう。

「大丈夫。アリアちゃんには何もしないよ。」と言って、軽く抱擁
してやった。

しばらくそのままでしたら、落ち着いてきたようので泣き止んだ。

「ありがとうございます。」

「じゃあ寝ようか」

「はい」

鼻声になっていた。

朝起きたら腕にアリアが巻きついていて。正直言ってやばい。生
理現象がおきる。

何とかゆすって起こした。どうやら朝は弱いらしく、ずっとボー
ッとしていた。アリアが寝ぼけたまま食事を取りに行く。

ここの宿は結構いいのではないだろうか。二食付きで銀貨二枚。
これが普通なのか？

今日はギルドに行って迷宮について聞く予定だ。

ギルドに着いた俺たちは受付嬢に話しかけた。

「ちょっと迷宮について聞きたいんだが」

「はい、何でしょう。」

「現在近くにある迷宮はなんだ？」

「ソルト迷宮がこの町から少し歩いたところにあります。一度行つた迷宮は、この町の中からであれば念じることで入り口まで辿り着くことができます。」

「そうか。ありがとう。」

礼を言つて立ち去つた。

「じゃあとりあえずソルト迷宮に行くか。」

迷宮への道は詳しく聞いてある。

「はい、ご主人様」

昨日の夜からご主人様と呼ぶことに決めているようだが、正直言つてこつちが慣れない。

迷宮への道は簡単で近かつた。街道をまっすぐ行つて、途中で曲がるだけだ。

ちなみに、そのまま街道を真っ直ぐ行くと王都に着くらしい。

迷宮の入り口はただの穴だつた。本当に、ただの穴。

「とりあえず入ってみようか？」

そうアリアに話しかけると、自ら穴に脚を踏み入れた。

穴に入ると自分の周りの世界がただの暗い穴から一変し、探しても光源がないのに明るい小部屋に居た。

後ろから突然アリアが入ってきた。これどうやって出るんだろう。

「これどうやって出るんだ？」

「小部屋で念じれば出られるはずです。ここ以外の小部屋でも大丈夫です。」

念じてみる。 おお！出られた。小部屋に戻ろう。

「少し進もうか。」

「はい、ご主人様」

奥に進んでいくと獣が出てきた。なんかオオカミっぽい。青の毛並みだ。先手必勝！ってわけで、速攻で弓を出し、矢を出し、つがえて放つ。

一撃だった、前もだけど。おっ！何か落としてる。ドロップアイテムだろうか。

何だろうと思って近づいてみると毛皮だった。毛はごわごわして硬い。とりあえず拾っておこう。

拾ったら『ポン！』という効果音と共に謎の箱が出てきた。箱を開けると中には凄く広い空間があった。感覚的に言えばドラ もんの四次元ポケットみたいな感じた。とにかくいっぱい入りそう。

「ご主人様。それは何の箱でしょうか？」

「・・・・俺にもわからん。」

アリアも知らないらしい。毛皮を入れてみよう！多分レアドロップじゃないし！

入れたら消えた、箱が。毛皮もどこにもない。もしかしたら弓と同じかもしれない。念じてみる。 やっぱ出てきた。どうなってるんだ？俺の体。

「また出てきました・・・」

アリアが驚いている。まあ、無理もないだろう。当人の俺も驚いてるんだから。

しばらく道なりに進んでいった。途中で何体かのオオカミにあったが、いづれも遠くのことと、オオカミが攻撃する前に矢で仕留めた。

もうちょっと進むと小部屋に出た。ここからも帰れるのだろう。

念じて戻った。

外に出た俺たちはカルムに続く道を歩いた。青いオオカミの毛皮は14枚集まっている。アイテムを落とさないということは無かったので、14体倒したことになる。何体倒したかはあのカードに記録されるようなので、アリアも倒さないといけない。

ちなみに、迷宮などのボスモンスター（フロアごとに設置されているボス）は十体分と換算されるのでそれを倒せばノルマは自然と達成となる。アリアのノルマ達成のために、止めをアリアにさせればいいだろう。

宿へ戻った俺たちは荷物を置いて物件を探しに行った。一週間分の宿は借りてあるが、早めに探しておかないといい物件は手に入らない。

家の看板がかかっている店に入った。店の中は落ち着いた雰囲気

で奥に恰幅のいいおっちゃんが立っていた。

「今日はこういった御用でしょうか？」

「家が欲しいんですけど・・・」

「どのような家ですか？」

「二人か三人で住むのにちょうどいい大きさを、できれば便利なおとこがいいです。」

「ん」

店主はかなり悩んでいたが該当する物件が思い当たったようだ。

「分かりました。ここから歩いて5分もかからないのでついてきてください。」

そう言うつとすたと歩き始めた。店番には既に別の人が立っている、さすが慣れてると言うべきか・・・

大体五分後着いたところは街道に出る道から一分も離れていない
集団集合住宅みたいなおとこだった。江戸時代とかのあの横に長い
奴（なまえなんだっけ？）

中は普通だった。ただ広くて何も置かれていない。家具を買わなければならぬようだ。

「35400メルでいかがでしょうか？」

「ピンきりで。」

値段交渉は大切だ。

「分かりました。」

交渉終了。つーか、こんなにあっさりと買えたんならもったいねえ
たんじゃね？とか思ったが既に交渉は終わっているのでしょうかな

いだろう。村長にもらったお金も半分以下になってしまった。

今日はこの部屋には泊まらずに宿に泊まることにした。家具を買わないと寝れないし今日の宿はもう取ってある。ついでに今日のうちに家具も買っておこう。

「アリア、今日のうちに家具を買っておこうか。」

「はい、ご主人様。ベッドは任せてください!」

ん? 何故にベッド? まあいいか。すげえ張り切ってるし。

金貨を八枚ほど持たせて俺はテーブルなどを買ったために町へ繰り出した。

今は家具屋に居る。既に完成しているテーブルや椅子が並んでいる。

俺はこれから住むであろう家の広さを思い浮かべて家具を選ぶ。テーブルは2種、椅子は3種まで絞ったがまだまだ悩みどころだ。一つ一つ説明していくと・・・

テーブル

1、質素なテーブル。しかし、手間がかかっていて表面がつるつる。凄く手触りがいい。

2、普通のテーブル。表面にニス的なものが塗られていていい感じ。

椅子

1、これまた質素な椅子。背もたれがついていない。座り心地はまあまあ。

2、質素な椅子。背もたれがついていて座るところが少しくぼんでいる。1より座りやすい。

3、普通の椅子。薄いクッションがついていて長時間座るのに疲れない。

それぞれのいいところを出したらこんなもんだろうか？

俺的にはテーブルは1、椅子は2がいいが・・・。

よし！即決！買おう。

一人で運べそうだったので、二回に分けて運んだ。最初にテーブルを運び、二回目で椅子を運んでいたらベッドを運び入れている最中だった。ふたつじゃなくて一つ。とてつもなくでかい。ダブル程度だろうか。

運んでいるのは良く筋肉がついていそうなおっちゃん3名だった。おそらく店のお手伝いだろうか。

「アリア、何でベッドが一つなんだ？」
「うつ・・・」

俺は小さくため息を漏らした。

「まあいいよ。」
そう言っただけで「ほっ」としたような表情で作業を見ていた。

（可愛いんだよなあ。べたべたすぎて困るけど・・・）
心の中で苦笑しつつ俺も作業を見ていた。

ベッドを運び終えたのは5分後で部屋の3分の1を占めていた。

それに椅子やテーブルが入っているのでさらに狭く感じる。

宿に戻って食事を摂ってから宿で眠りについた・・・

06話 〽買い物〽（後書き）

>補足説明<

クロノ 男 エルフ？

装備

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ
ステータス

Lv.7

HP 423

MP 524

AP 645

DP 692

使用魔法 ファイアボール、ウォーターボール、サンドボール、

ブラストボール（〽〽ボール）

ゴリアテ（三倍も）

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ
ステータス

Lv.5

HP 426

MP 374

AP 153

DP 273

使用魔法 ウォーターボール、ヒール

全体的に修正を加えて、今年の更新は終了です。

07話　く覚醒く

朝起きるとまたアリアが俺の腕を抱き枕にして寝ていた。今まで
は自分を抑えていたが、毎朝続くとつらいものがある。

（ちょっと、仕返してもしてみるか・・・）

俺は無理矢理体を動かして、アリアの腕から脱出してアリアを抱
きしめた。

アリアが気づいて、体を動かしたがもう遅い。

（抱き枕も結構いいもんだ。）

俺はアリアを抱きながら、また、眠りについた。

起きたのは太陽が真上に昇ったころ、ちょうど正午だ。
そろそろお金の心配もしなければならぬ。

現在、所持金はまだ10000メル以上あるがお金を稼がないと
すぐに底をつくだろう。

今、できそうなことは迷宮でモンスターを狩って素材を売る。依
頼を受けて報酬金をもらう。商人をやる、だ。

とりあえず、ギルドのノルマを達成するために迷宮へと向かおう。

念じてワープした先は、前に見た迷宮だった。穴に脚を踏み入れると一瞬で景色が変わる。これは結構楽しい。続いてアリアも入ってくる。

「今日で二階層までいければいいな。」
「そうですね。」

歩き始めてすぐにオオカミが出てきた。

「アリア、戦ってみてくれ」
「はい、ご主人様」

アリアが片手剣を鞘から出し、構える。
初撃をかわし、首元を狙って剣を振り下ろす。しかし、その攻撃は剛毛によってすべる。

次にくる爪の攻撃もかわし、もう一度首を狙った。今度はちゃんと首を捉え、切断する。

「見事だな。」
本当に凄かった。軽く避けてる。無駄の無い動きだった。

「有難う御座います。でも、ご主人様は一撃で仕留められるでしょう?」

「まあな」

それっぽく答えてみた。歩きながら話していると、前からまたオオカミが出てきた。

「ちょっと魔法を試したい。少し待ってくれ。」

俺が調べたかったのは、魔法の威力だ。せめて、アリアの剣の攻撃力程度があればいいのだが・・・。

「ファイアボール・・・」

自分感覚で握りこぶし一個分の魔力でファイアボールを放った。

放たれたのは、通路いっぱいに広がった炎の塊。オオカミへの着弾と同時に消滅したが驚いた。

結果は一撃。消し炭だ。それでもちゃんとアイテムは出てきた。いつもど通りの皮。消し炭から皮が出てきた。何でだろう？

もっと進んで同じ握りこぶし一つ分の魔力でウォーターボール、プラストボール、サンドボールを放ってみたが、結果は同じ。

・・・そうだ！イメージだ！！

今や、魔法の実験に使われているオオカミに小さく、濃密で、としっかりとイメージを固めてからファイアボールを試す。

大きさはサッカーボールほどの炎の玉が目の前に出てきて、オオカミに飛んでゆく。

それは、当たった瞬間に大爆発を起こし木っ端微塵にする。原型を留めてなくともアイテムが出る・・・なんでだ？

もっ少し進むと扉があった。厳つくて王宮にある感じの奴。

「ボス部屋への入り口ですね。」

「入るか。」

俺はそう言って入った。慌ててアリアも入ってくる。

中には白い狼がいた。さっきまで戦っていたオオカミとは桁違いに大きい。5mはありそうだ。

先手必勝ということでファイアボールを放つ。狼は咆哮フエンリルした。その衝撃波でファイアボールは掻き消される。

咆哮だけで魔法が掻き消されるのなら、前衛は危ないだろう。

「アリア、下がってる！」

「で、でも！」

「いいから！」

とりあえず、ゴリアテを作って前衛を任せる。こちらに近づけないように

弓を放つ、狙いは右肩。続けて放つ。

四本放ったところで相手の体勢が崩れる。

チャンスと思い、ゴリアテを近づける。しかし、それは咆哮で消し飛ぶ。

「うわっ、どんな声帯してんだよ。」

もう一体ゴリアテを作り出す。前衛を任せて、俺は左肩を狙う。

目的は完全に動きを止めること。三本目を放ったところで完全に体勢が崩れた。

なんか、このまま行くとリンチになりそう。

アリアは近づけないし、このまま俺が倒すか？いや、そのままだとアリアの目標達成も厳しいだろう。

考え事をしている間にゴリアテが潰されていた。肩からは矢がす

べて抜けている。

「・・・ッ」

思いつきり体当たりをしてきた。俺は真後ろに吹き飛ば、アリアが前に出て剣を振るう。

その攻撃は当たる前にアリアは飛んでゆく。

狼は大きな口を最大まで開き、俺を一息で飲み込んだ。

此処は何処だ？

俺は生きているのか？分からない。

「きゃああああっ！」

！！

助けなきゃ・・・
体が動かない。

『汝、力を欲するか。』

（ああ）

『ならば望め！新しい力を！』

解き放て！汝の体の奥底に眠る力を！
われ

アリア side

ご主人様が食べられてしまった。

どうしよう、どうしよう、どうしよう・・・
助けよう。

「きゃああああっ！」

真上に弾き飛ばされてしまった。すぐに落下の衝撃が襲ってくるだろう。

私は目を瞑った。

強い衝撃がカラダを襲った。

アリア side out

体中から力がみなぎってくる。俺は目の前にある壁を殴った。柔らかな感触と共にそれは破ける。

出たらそこは迷宮だった。前にアリアが倒れている。

後ろにはフェンリルが倒れていた。

アリアの意識はなかった。体中の骨が砕けているのだろう。

ヒトの骨格を思い浮かべる。

「聖なる魔法よ！肉体を癒せ！ヒール！」

アリアの体の表面的な打ち身から、骨折がすべて治っていく。

「ふう、終わった。」

体に軽い疲れが襲う。

「水よ、我をきれいに、ウォッシュ。」

体をきれいにした。

「ん、んっ・・・」

「気づいたか。」

「！！」

何か凄く驚いている。

「どうした？まだどこが悪いのか？」

「えっ、いや、ご主人様がハイエルフだったので・・・」

「へ？」

ハイエルフといえばエルフの王族である。

そこで話し合い。

普通のエルフとハイエルフの違いはなんとなくわかるらしい。
ハイエルフは闇を除くすべての魔法を使うことができる。 など
など。

二階層の小部屋に入り、街へ戻った。

既に日は落ちかけていたが、落ちきる前に家へ戻ることができた。
ちなみに今日から家で暮らす。 お世話になった宿の人に礼を言つて
荷物をすべて持っていった。

部屋に戻った俺は、すぐにベッドに倒れこんだ。

倒れこんだらすぐに眠りについた・・・

07話 〽覚醒〽（後書き）

>補足説明<

クロノ 男 ハイエルフ

装備

グリンディア（弓）、ローブ、布の靴、グローブ
ステータス

Lv・7

HP 423

MP 524

AP 645

DP 692

使用魔法 本人が知っている魔法全て

アリア 女 ハーフエルフ

装備 銀の片手剣、革のジャケット、皮の膝当て、皮のブーツ
ステータス

Lv・6

HP 466

MP 394

AP 183

DP 303

使用魔法 ウォーターボール、ヒール

新年明けましておめでとう御座います。

まだまだ未熟ですがどうぞ今年もよろしく御願いします。

K | S a y u t o 様、魔法のアイデアを出していただき有難う御座います。

08話 〓探索(街編)〓(前書き)

すみません、短いです。

08話　く探索（街編）く

知らない天井だ。 テンプレどりの言葉を呟きつつ体を起こした。

・・・ん？普通に起きることができた。

アリアが居ない？　どこへ行った？起きたのか？

寢室を出ると、少し大きめのテーブルに料理が並んでいた。

手前から、サラダ、パン、スープ、キツネ色に焦げがついた肉だ。

「あつ、起きたんですね。」

「ああ。」

アリアは普通に料理ができるようだ。これからは作ってもらおう。

今日は何をしようか？昨日迷宮で殺されかけたばかりだから迷宮には行きたくない。

街を回ろう。うん、それがいい。

料理はどれも美味しかった。しかし、スープに使う塩が少ない。言わないべきだろうか？

俺たちはアリアの説明を受けながら街を歩いた。

「この街はロクスミッド区、アルスミッド区、グルーミッド区、バ

ルグミッド区があります。

ロクスミッド区には、領主や貴族などが住まいます。アルスミッド区は商業をやるために作られた土地です。

グルーミッド区は一般の人が住む居住区です。私たちの家もこれに当たります。

バルグミッド区は・・・貧困区です。荒くれ者も多いと言われています。私は行った事はありませんが。」

「ギルドはどの地区にあるんだ？」

「ギルドはどの地区にも属しません。たとえば、ロクスミッド区にあっても、バルグミッド区にあっても変わりません。」

「そつえば、冒険者ギルドのほかにギルドってあるのか？」

「はい、商業者ギルド、農耕者ギルド、ハンターズギルド、建設者ギルドがあります。」

「・・・？」

冒険者ギルドとハンターズギルドの違いってなんなんだ？」

「管轄が違います。」

冒険者ギルドは魔物などの討伐依頼を中心に、ハンターズギルドは猛獣の討伐依頼を中心に受注、討伐します。

他に質問はあるでしょうか？ご主人様。」

「アリア。」

「何でしょう、ご主人様。」

「その『ご主人様』って言うのやめられるかな？」

「分かりました。クロノ様、でいいでしょうか？」

「ああ、それで頼む。」

ん？何で言わせないのかって？

痛いんだよ、他の人たちからの視線が！

「奴隷は一般的じゃないのか？」

「はい、貴族は大抵『養子』という形で奴隷を迎えます。
人を売買するということは同じです。」

ですから、『ご主人様』と呼ばれることはあまり無く
『義父様』と呼びます。」

屋敷で呼んでいた呼び方が・・・。

気づいたら結構街中にいた。露店があり、そこから美味しそうな匂いがしてくる。

最後は暗い話で終わってしまったし、何か食つか。

まず一つ目。今俺が居る位置でもっとも近い露店では串焼きを売っていた。

いい感じに塩味が効いていて旨い。白米が欲しくなる。

二つ目。麺類だ。ラーメンの発展途上っぽい。
普通に美味しかった。

三つ目・・・グルメリポートになってないか？まあ、美味しいからいいか。

こうして街の探索が終わった。・・・腹が苦しいぜ・・・。

俺たちは家に戻った。

この世界では、太陽が落ちたら一日の終わりだ。『今日』はもう終わろうとしていた。

露店でお腹が膨れていたのもう寝ることにした。

「おやすみ、アリア」

「おやすみなさい、クロノ様」

俺はまだ一線を破れずにいた・・・。

08話 〱探索(街編)〱(後書き)

やっぱ短かったですね・・・。

すみませんでしたm(_____)m

次回はもっと頑張ります。感想くねると天井破って喜びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3470z/>

異世界とオレと迷宮と??

2012年1月10日22時46分発行